

伊勢物語における「みやび」——和漢比較の観点から——

大井田 晴彦

はじめに

『伊勢物語』は、10世紀成立の歌物語である。六歌仙の一人として有名な在原業平を彷彿させる主人公の「男」と、多くの人々との交流を、主に和歌の贈答を通して語っていきこうとする。男女の恋のみならず、肉親の情愛、友情、君臣の絆など、人間関係の諸相をくまなく描いた、日本文学史上の傑作である。本稿では、主人公の人物像・人物造型と、彼に体现されている「みやび」の思想について、中国文学との関連を視野に収めつつ考えていきたい。

1

『伊勢物語』の主題として、しばしば「みやび」という語が冠せられる。この語は物語において頻用されるわけではなく、初段に一例を数えるに過ぎない。しかし、物語がその始発に、この語を据えていることは、『伊勢物語』が「みやび」の文学であることを自ら宣言していると解してよいのだろう。

そもそも「みやび」とは何であろうか。ミは美称、ヤは家屋・邸をいうから、王者・貴族の殿舎が建ち並ぶ空間がミヤコであり、ミヤコ風に振る舞うのがミヤブである。すなわち都会風、宮廷風で洗練されたさまを指すのが原義ということになるが、もう少し意味を拡げて考えたい。

奈良・平安時代の文献資料において「みやび」と訓み得る漢字には、「雅」「閑」「風流」などが挙げられる。「雅」は、邪なものを退け、正道を貫くという、君子や為政者の美德を意味する¹。「閑」は、門を閉ざし、世間と交わりを絶つ、という意味である。俗世間に背を向け、自邸に籠もり、心許した友たちと、詩歌管絃に興じ、あるいは、飲酒を楽しむ、といった閑適の暮らしをいうのである。『伊勢物語』八十一段は、「賀茂川のほとり」「六条あたり」に豪邸を構えた河原左大臣源融の暮らしぶりを語っている。融は自邸を、陸奥の塩釜の景（日本で最も風光明媚な地とされた）に模し、人々を招いては、四季折々の風月を愛で、詩歌管絃に興じた、とある。融は嵯峨天皇の皇子であり、帝位への強い野心を抱いていたが、撰閲家の思惑により即位できなかった、政治の世界における

1

片桐洋一「伊勢物語根本」(『伊勢物語の新研究』1987、明治書院)

敗北者である。かかる挫折感が、その恵まれた血統と財力を抛り所としながら、融をして、脱俗的な生き方へと向かわしめるのである。いわば俗世界の敗者である彼は、芸術・文化の領域での優位を誇示しようとするのである。ちなみにこの段に語られる、融のサロンの集いが、『伊勢物語』の母胎となった可能性がある。たとえば、融の邸で、陸奥を旅する立場になって、歌が詠まれた、それが一連の東下りの物語として今に伝えられている、と想像されるのである。

現代の我々にも馴染みのある「風流」は、中国においては語義に歴史的な変遷を伴う言葉であった。本来は王者の政治的風化を意味したものが、個人の道徳的風格へと転じ、さらには六朝の竹林の七賢のごとき脱俗・反俗的な振る舞いとなり、ついには自由奔放、好色、浮薄なものまでを指すようになったのである²。

2

前節に見たように、「みやび」の語義には、かなりの幅があるのだが、その多義性を踏まえた軽妙な和歌の応酬が『万葉集』に見られる。

みやびを(遊士)と我は聞けるをやど貸さず我を帰せりをおそのみやびを
(風流士)

みやびを(遊士)に我はありけりやど貸さず帰しし我そみやびを(風流士)
にはある

(巻二・126~127)

漢文による長大な左注が、この贈答の事情を伝えている。大伴田主は、「容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし」という美貌の持ち主であった。田主への想いを遂げようとする石川郎女は、自ら老婆に扮し、鍋を手にして、「東隣の貧女、火を取らむとして来たる」と彼のもとを訪ねた。田主は言われるままに火を与え、そのまま送り帰してしまった。翌朝、男の野暮な振る舞いを詰る歌が贈られてきて、田主は鸚鵡返しのごとき歌をもって応じた、というのである。このやりとりの眼目は、「みやびを」の語義をいかに理解するかに関わる。郎女の贈歌は、「貴男のことを恋愛の道に通じた方とうかがっておりますのに、私を泊めずにお帰しになるとは、ずいぶんと間抜けなみやびをですこと」、くらしい意。田主の返歌は、「私こそ正真正銘のみやびをだったのです。あなたの誘惑にも迷わされず帰したこの私こそ廉直な君子というべきなのでしょう」といった意で、一種の開き直りともいえる。

大伴田主は経歴不詳、おそらくは実在の人物ではない。このやりとりは実際にあった出来事などではなく、漢詩文に通じた者の机上の戯作と見られる。

左注の文章は、『文選』『玉台新詠』などの六朝文学に学んだ痕跡が著しい³。特に「東隣」には絶世の美女が住む、というのは、類型表現であった。この話の直接的な典拠は、『文選』巻十九「登徒子好色賦」に求められる。登徒子という大夫が、楚王に宋玉のことを讒言する。いわく、「宋玉は、容貌がたいへん麗しく（体貌閑麗）、弁舌さわやかで、さらには好色ときております。宋玉を、決して後宮へ近づけてはなりません。」宋玉は次のように反駁する。「天下一の美女が私の故郷の家の東隣におります。この娘が、垣根に登っては私の様子をうかがうこと三年になりますが（此女登牆窺臣三年）、私は全く相手にしておりません。一方、この登徒子の妻は、髪は乱れ、耳はつぶれ（蓬頭擘耳）、齒は欠け、足はふらつき背も曲がっています（旁行踽偻）。こんな妻との間に五人もの子をもうけました。私と登徒子と、どちらが好色でしょうか」と。この賦と、『万葉集』の「みやびを」問答の対応は明瞭であろう。田主の造型には、美貌の風流才子として名高い宋玉が、重ね合わされていることになる。

3

田主と郎女の贈答の他にも『万葉集』には、「みやび」の語が散見されるが、その多くは奈良時代、和銅三年（710）の、平城京遷都以降の作と考えられる。この事実は、さまざまな示唆を含んでいる。周知のように、平城京は中国の長安を模して造られた都市であった。従来とは比較にならぬ、異国情緒あふれる大規模な都市が生まれたのである。この都市で営まれる貴族たちの生活もまた、中国風・大陸風であったとおぼしい。先進国であった中国の文化にたっぷりと浸り、自らを染め上げること、それこそが貴族らしい振る舞いであり、「みやび」に他ならないのである⁴。

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ

（巻五・八五二・大伴旅人）

大宰府の旅人邸における梅花の宴の歌。夢に梅の花が美女の姿となって語りかけるという趣向には、唐代小説『遊仙窟』など漢文学の影響が濃厚である。周知のように、梅は、中国渡来の、異国の花である。宴の歌群には、旅人による漢文序があるが、王羲之「蘭亭集序」に倣ったものである。旅人らの知識人は、舶来の文物をいち早く取り入れ、最先端の流行を生み出したのである。旅人の赴任したのが、大宰府という大陸への窓口であったことも、好条件であった。このように、『万葉集』の「みやび」の用例が、宴席での歌に集中するのも注意される。宴での人々の一体感、高揚感を基盤として、「みやび」が発揮されるのである。

3

蔵中進「石川郎女・大伴田主贈報歌」（伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ 第二集』1977、有斐閣）に詳しい。

4

森野宗明「みやび」（『国文学解釈と鑑賞』1977.2）

巨勢宿奈麻呂家の宴席で詠まれた歌。囊蔓に化した蓬莱の仙女の歌という。旅人の歌に通ずる発想が多分に認められる。中国の最先端の文化に染まり、さらには神仙的世界に遊び、世俗を超越することが、「みやび」なのだといえよう。中国文化との接触、模倣によって、「みやび」が育まれてきたのである。

さらに、都市の成立・発達に関して、見逃せない問題がある。それは、前掲の「みやびを」問答に示されるように、この時期に相聞歌が大きな発展を見せることである。和歌が人々の社交の具として重みを増してきたといえるが、これは、人と人の関係が密になってきたことを意味するのでは全くない。事情はむしろ逆であって、都市化の必然として、従来の血縁的・地縁的な共同体が崩壊へと向かい、人間関係の稀薄化・疎外化が進行していることを裏付けるものと見るべきである。共同体の紐帯を失い、ばらばらになってしまった都市の住人たちが、連帯を回復すべく歌を詠み合う、そこに相聞歌の発展の根拠がある。

4

続いて『伊勢物語』の「みやび」について考えていきたい。用例上は初段に一例しか見えない「みやび」の語であるが、その精神は物語全体を覆っていると考えられる。その発現のしかたもさまざま、「みやび」のカatalogといった趣を、この物語は有している。まずは初段について見ていこう。初冠(元服)を済ませたばかりの若き主人公が、旧都奈良の春日の里に赴く。そこではからずも「いとなまめいたる女はらから」を垣間見た男は、心の動揺を鎮めがたく、「春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れかぎり知られず」という歌を狩衣の裾に書きつけ、姉妹に送った、というのである。「春日野の～」の歌について、語り手は「陸奥のしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」(河原左大臣源融の歌)を参考に掲げ、さらに「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」と語りおさめている。これが作中唯一の「みやび」の用例である。

平安京を離れた、さびれた古都で、美しい姉妹と出逢う、という初段の筋立ては、唐代小説『遊仙窟』を下敷きにしている⁵。作者張文成が旅の途次、積石山の神仙の岩屋に足を踏み入れ、五嫂・十娘の二人の美女と出逢い、歓待を受け、詩を贈答する、というのがその梗概である。『遊仙窟』は、中国本国には現存しないものの、日本では多くの知識人が挙って読んだ。『万葉集』をはじめとする多くの文学作品に影響を及ぼしており、『伊勢物語』もまたその例に漏れない。初段の主人公は、張文成のごとき風流才子の相貌を宿しているのだが、とはいえ、『遊仙窟』の単なる模倣に留まってなどいない。痴情とも称すべき、歓楽に耽溺する男女を描いた『遊仙窟』から、元服まもない青年の恋の始まり

5

丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』(1964、東京女子大学学会)

をみずみずしく語る初段へと、その換骨奪胎の妙を味わうべきであろう。

物語は、姉妹に歌を贈った、男の振る舞いを「いちはやきみやび」と評しているが、前節でも触れたように、和歌の贈答と「みやび」とは不可分の関係にある。都市化の進行につれて人間疎外が深刻化していくなかで、人と人の連帯を和歌によって回復する営みとして「みやび」はあった。そうした人と人を結びつける和歌の威力を高らかに宣言したのが、初段であった⁶。

6

秋山虔「伊勢物語・「みやび」の論」(『王朝の文学空間』1984、東京大学出版会)、「「みやび」の構造」(『平安文学の論』2011、笠間書院)

5

さらに、六十九段を取り上げよう。『伊勢物語』という書名は、主人公と、伊勢の斎宮との恋を語るこの章段に由来するといわれる。平安時代には、この段を冒頭に置く本もあったようで、初段と並ぶ重要な段といえよう。狩りの勅使に任命された男が、伊勢の国に下る。斎宮は、男と縁続きでもあって、懇ろに世話をする。二日めの朧月夜、子の刻に、童女を先導させて斎宮の方から男のもとにやって来た。「子一つより丑三つ」まで、二人は何も語ることなく過ごし、やがて女は帰った。男は、この夜の不可思議なできごとを「夢」か「うつつ」か、訝しく思うのだった。伊勢神宮に仕える巫女として、斎宮は恋愛を禁じられている。そのような斎宮との禁忌の関係を語る重々しい章段だが、これが実は、元稹作『鶯々伝(会真記)』を下敷きとしていることは、既に多くの指摘がある⁷。この小説の主人公、張生は、性質が穏やかで、容姿が美しい(性温茂、美風容)若者だが、二十三歳になっても浮いた話がない。「登徒子などとは異なり、自分こそが真の色好みなのだが、まだ理想の女性に巡り会わないだけだ」などとうそぶいている。この張生が、親類にあたる崔氏の娘(鶯々)と出逢い、恋に落ちることになる。ここでは具体的な文章の比較検討は省略に任せるものの、その影響関係は疑うべくもない。初段と同様に、この段でも、中国の風流才子のイメージを重ねて、主人公の人物造型がなされているのである。なお、『鶯々伝』が後に、元曲『西廂記』へと翻案されたことはよく知られている。人々の創作欲を掻き立てる魅力が、この小説にはあるのだろう。

7

田辺爵「伊勢竹取に於ける伝奇小説の影響」(『國學院雑誌』1934.12)以降、多くの論がある。

ところで、業平への中国の風流才子の投影は、『伊勢物語』に限ったことではないのであった。『三代実録』元慶四年(880)五月二十八日条の業平の卒伝には、次の評言が見える。

業平体貌閑麗、放縱不拘。略無才学、善作倭歌。

現代の我々が抱く業平像の原点というべきものだが、「体貌閑麗」とは、「登徒子好色賦」における宋玉の形容に他ならない⁸。仮名による虚構の物語と、漢文による国史の薨卒伝の世界が、意外なほど近接していることを知るのである。

8

渡辺秀夫「在原業平の卒伝の解釈」(『平安朝文学と漢文世界』1991、勉誠社)

六十三段に、次のような話がある。ある好色な老女がいた。どうにかして「心なさけ」ある男と逢って想いを逃げたいと思っていた彼女は、偽りの夢語りをする。気の毒に思った三男が在五中将（業平）との仲を取り持つ。しばらく男の訪問が途絶えたので、老女みずから男の家に出かけ、様子を垣間見する。男は、その姿を認めて、「百歳に一歳たらぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆ」と詠み、出かけて行く素振りを見せた。女は慌てて家に戻り、もの思いに臥せているさまを装う。「さむしろに衣かた敷き今宵もや恋しき人に逢はでのみ寝む」と詠む女を「あはれ」と思って、男は一夜を過ごしたのだった。語り手は、「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は、思ふをも、思はぬをも、けぢめみせぬ心なむありける」と、男の思いやりを称賛している。

この段は、『万葉集』の「みやびを」問答、およびその原拠たる「登徒子好色賦」を踏まえ、換骨奪胎しているとおぼしい。女の詠歌の「百歳に一歳足らぬつくも髪」とは、つく藻（海藻）のような白髪の老女、の意。「百」から「一」を引くと、「九十九」になり、また漢字の形から「白」になることを重ねている。「好色賦」における、登徒子の妻の形容「蓬頭」も響いていよう。そのような老女が、石川郎女のごとく、自ら男のもとに出かけて行く。老女が男を垣間見たのは、やはり「好色賦」の「此女登牆窺臣三年」を彷彿させる。二人のやりとりは多分に演技がかっているのだが、かかる点も『万葉集』の「みやびを」問答に通ずるものがある。

しかし、ここでの男は、宋玉や田主とは正反対の態度を取る。女を「あはれ」と思う男は、拒むことなく共寝するのである。道徳的で高潔な「みやびを」でなく、もう一つの選択肢、色好みとしての「みやびを」を、男は選び取ったことになる。とはいえ、この男を単なる好色者・漁色家のように解するのは間違いである。

老女は「心なさけ」ある男に出逢うことを願い、三男は、他の男は「いとなさけなし」、全く情愛を持ち合わせていないので、在五中将と逢わせたい、と思うのだが、この「なさけ」の語に注意したい。「ナサはナシ（作為する）と同根、ケは見た目・様子の意の接尾語」（岩波古語辞典）というのが、この語の本来の意味であるらしい。このような老女と誰しも契りを結びたいと思うはずがないが、あえて本心を押し隠して、相手を傷つけることなく愛情を装う、これが「なさけ」であり「みやび」ということなのだろう。「みやび」とは、ミヤコに住む貴族にとって、貴族として生きていくために、不可欠の倫理であった。

むすび

『伊勢物語』の「みやび」について、主に中国文学との関わりから考えてきた。他に取り上げるべき章段は多いが、紙幅の関係で、最も重要な段に限定せざるを得なかった。

物語の末尾に位置する、百二十四段と百二十五段を取り上げて結びとした。百二十四段では、男は「思ふこと言はでぞただにやみぬべき我とひとしき人しなければ」という歌を詠む。いったい、人と人とを強靱に繋ぎ止める和歌の力を高らかに宣言したのが、この物語の始発ではなかったか。しかし、和歌にはそのような力は備わっていなかった。畢竟、人と人は理解し合えない、という絶望を抱いた男は、詠歌を断念することになる。

百二十五段は、「つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」という辞世の歌で閉じられる。前段で歌を放棄しておきながら、ここで歌を詠むというのは矛盾のようでもある。しかも誰もその歌を受け止めてくれそうにもない。しかし、それでもなお、男は、人生の閉じめという重要な局面に際し、自ずと歌を詠まずにはいられないのである。ここに「みやび」に染まり切った男の、孤独な姿を見るのである。

なお、文化の翻訳という観点から、初段の「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」がどのように中国語・英語に翻訳されているか見ておきたい。この原文は難解だが、「昔の人は、このように素早く激しい、(歌を詠むという)風流な振る舞いをしたのだった」といった意味である。豊子愷訳(1984)は「従前的文人、尽管年紀很輕、就会試行即興地、表現風流情懷(昔の文人は、年若いとはいっても、即興で歌を詠んで、風流の心を示すことができたのだ)」⁹、唐月梅訳(2005)はほぼこれを踏襲し、「昔日的人尽管年少、却已嘗試即興詠歌、以表達風流的情懷」とする。最新の林文月訳(2011)は「従前的人、可真是熱情、解得風雅的啊(昔の人は情熱に溢れており、風流の心をよく理解していたのだった)」である。H.G.McCulloough訳(1968)では“People were remarkably elegant in those days(当時の人々は、際だって優雅なのだった)”, H.J.Harris訳(1972)は“The men of former times thus felt deep elegance(昔の人々は、このように深みのある優雅さを感じていたのだった)”となっている。概して、英訳が平板で表面的であるのに対し、中国語訳はより具体的なものとなっていることがうかがわれる。

9

以下、中国語訳の大意については、梁青氏(名古屋大学大学院生)の教示を得た。

(付記)本稿は、名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター・上海交通大学外国語学院外国文学研究所共催の国際シンポジウム「文化の越境、メディアの越境—翻訳とトランスメディア」(2011年12月10日、於上海マート)における同題の発表に基づく。